

要するに虚心恒懷兩派の主張を比較しますと何れにも獨斷的の所もあり早計と考へらるゝ所が籠つてをります。开は兎まれ大体題目に對し兩派の懷抱する所は了解になつた事と信じますから之にて段落をつくる事と致します。

サンヂカリズム及其沿革

下 林 一 之

サンヂカリズムとは、勞働組合の力により又はその司配の下に黄金時代を現出せしめんとする方法である。これは勞働社會即ち第四階級の正當の權利を確保するといふ事は、たゞその勞働社會自身の獨立にして強壓的な努力に俟たねばならぬといふ考に基いて居る。

それで、この主義は社會文化の比較的後期に在いて漸く現れ得るものである。初期の歴史に在いては勞働する人々は全く存在を認められて居ない。差別は原始の社會の特徴である。筋肉が強く、齒や爪の鋭い獸の様な奴等が、鐵の棒をふりあげて弱く同胞を壓服したものだ。少し後には降神術者と云つた様な神秘の方を持つた人々が、色々恐しい儀式を行つたり何かして奇怪な勢力を占めて居た。何れにしても兎に角被治の多數は統治する少數の下に有つた事は疑はれない。我々がサンヂカリズムを研究する時には、如何にしてこの被治の多數即ち第四階級が公然と團結し、我生命はわがものなりと公言するを憚らない様になつたかといふ経路を調べるといふ事は極必要の事だと思ふ。

歴史の初期には第四階級は存在を認められずして汲々と働いた。彼等はかのファラオの陸を築くために

人夫頭から仕事を急き立てられながら蟬蛸の様に死んだものだ。たゞ東方の國々に在いては三千年以上も前に不平の聲も多少聞けたらしい、例へばこゝに有名なるエジプト研究家マスベロ氏の著から一頁をぬけば『私は爐の前に座つてゐる鍛冶師を見た事がある。手は鱷魚の皮の様にわれて居た。又私は職工を見た事がある。彼の運命こそ女のそれよりも辛いものだ。腰は丁度胃と同じ高さにある、そして新しい空氣も吸へない。それでもし定まつただけの仕事が出来なからうものなら、丁度水面に葉と花だけを出した蓮の様に足枷を掛けられる。もしさうなつたら獄吏に賄をしなければ二度と日の目は拜めない。』と。かういふ時にサンデカリズムに行くべき道のなかつた事は上の事實だけでも充分信じられよう。商業國アツシリアに在いては奴隸も或る程度迄財産の所有權があり、主人と共に團體を作る事も許されてあつたが一般には第四階級はその對峙せる酋長が新に他の地方を征服しようとする時分に殆も糞土の如く踏み蹂られた。

スバルタではヘロッツ(奴隸)は時々戮殺された。餘り強くなつてサンデカリズムの様なものを望む様になつては大變だと恐れてゐる。又かの多くの共和主義者の理想と稱せられて居るアテネに在いてさへ、その自由は多くの奴隸を壓服する少數のための自由であつた。プラトンは理想國を考へた。けれども彼は人々を同等なりと見たのではない、各異つた金屬で出来て居ると思つて居た——あるものは金で、あるものは銀で、またあるものはもつと下等な金屬から出来て居ると思つたのである。キケロの雄辯記録を見てもローマの大長屋の事についてはほんの少しばかりそれも偶然に説き及ぼして居るだけである。がその大長屋に在いては罪惡混亂、飢餓、惡疫の中に多數の首都の民が生れ且つ死んだのである。實に一揆や革命的の騷動がなければ古代史中の賤民は遂に存在を認められずに濟んでしまふのである——この点は近世のサンデカリズムも同感であ

らう。スバルタクスの叛はブルタークの批評に上つた、しかしぞれだけの劍^{グラデエチ}優がスバルタクス以前に生きて居て苦んだ事だらう、だが誰もしるものはない。ギリシヤのリユシアンが筆を振ふて、死んだ靈魂の群がステイクスの河(冥途の川)にして三途の川といふ如きか)へと漂浪ふ様を描いた時その泣き悲む群の中である靴直しの職工を最も柔順なるものに描いた。この靴直しは何も失ふべきものをもたなかつたのである。彼は臨終の日の來た事を知らせるアトロポスのしらせのあつた時には喜んで飛び上つた。マーキュリー神が彼に涙を出して何か悲しみの語を出さねばいけないと教へてやつた時(これは當時の習慣だつたさうな)彼の悲みの言葉はかうであつた。

『あゝ革の屑よ。あゝ古靴よ。あゝく。俺はもう二度と朝から晩まで何も食べずに歩く事もあるまいし、はだしでしかも冬の日に胖纏一枚でガタ／＼震へながらはつきり歩く事もあるまい。でもまあ誰が俺の後をついで大針や革削りを持つ事だらう。』と。こんな模範的職工は今日のシンジカリストとは全く異つた生物であるに相違ない。

基督教の勃興し發展した時代は第四階級の運動に取つて見のがすべからざる時代である。ダイスマン其他の研究によれば、新約全書は(ヘブライ書だけは別であるが)方言で書かれたもので、この新宗教のはじめの信者は賤民團體の諸階級から直接に出て來たのだといふ。兎に角少し後に大に發達した組合の下拵へといふ様なものが此時すでに存在して居た事は確らしい。このキリスト初期の時代の事は少し委しく研究する必要があるが、當時職工の秘密結社のあつた事は疑ひはない。それらは基督教と接觸して後期のクラフト、ギルド及初期のツレード、ユニオン^{の儀式に宗教的色彩を帯びさせた。}

基督教の宣言にはかうある。『ユダヤ人もなければギリシヤ人もない。又奴隷も無ければ自由民も無い。』しかし同時にこの新宗教は奴隷制度の存在を否定しなかつた。ローマ帝國の衰亡時代にたいして起つた大變化といふべきは、土地問題が經濟史中の主なる物となり、また從來征服者のために土地を耕し——又或る場合には眞の土地所有者であつた——奴隷が農奴と變へられた事である。スコットを愛讀するものは、サクソン人の農奴ガースの事を憶えて居るであらう。——皮の上衣、猪の草で結んだはきもの、むきだしの頭、それから首の周圍にハンダ付けされた眞鍮の輪、その輪にはかうはりつけてあつた。 *guth, the son of*

Beowulf, is the horn thrall of Cedric Rotherwood

最近の中古奴隷制研究者中には農奴の苦みは餘程少なかつたといふ人々が多い。農奴を賣る事は主人の權利であつたがその特權は滅多に行使せられなかつた。彼等は行爲不行爲に義務つけられて居たがその行爲不行爲も習慣によつてはつきり定められる様になつた。それで古代の奴隷制に較べると中世の農奴なるものは第四階級の狀態の進歩と見られる。しかし農奴が自己救済のために運動を始める得る状態にあつたとは如何しても云へない。彼等は嚴重にその生れた地面に植ゑつけられて居た。彼等は色々の要求や強請をはたさねばならぬ義務があつた。それらは習慣によつて限られて居たとは云へ、一生を通じての事であればその煩にたへない。それだからとてその封建的主人に代表者を送つてその待遇の苛酷を訴へる事があれば——十世紀の末頃ノルマンデイにたいしては實際此事があつたが——その場合には主人は同胞のために請願に來た罪なき人々の平定を切り放つてその答とした。次に『紀元一千年のマルセイユ』といふ佛國の「ロマン、ド、ルー」の有名な一節を抜ぐ。

『俺達をこの苛政より濟へ』これは農奴の語である。『主人が人なら俺達も人である。主人の手と俺達の手と何處がちがふ。俺達にも亦苦みもあれば情もある、優しくもあれば眞實でもある、情がある。』こゝに於て我々はサンデカリズム的精神を見出す。然れどもまだサンデカリズムとして必要な團結の能力を缺いで居る。十四世紀、十五世紀にクラフト、ギルドが現はるゝに及んではじめて、サンデカリストの先驅らしいものを見る事が出来る。

『十四世紀に職工等は權利保護のために組合を作つた。この組合を作つた事は職工のある階級中に間隙を作つた。即雇人又は職工の親方と労働者間の葛藤である。職工は彼等の利益殊に労働時間と賃金に關する利益保護のために團體を作つた。そして種々な方法で労働問題に關して主人側と争うた。かゝる争はやがて西歐全土に擴がつた。が最も著しかつたのは獨、佛、英の三國である。この兩者の争ひは十五世紀の獨乙産業界の立役者であつた。英國では労働者の組合は獨立のために奮闘したけれども主人側の組合のために壓服された様だ。

換言すればこれらは比較的古い労働組合の助成物又は媒介物と成つ。(エンサイクロペヂヤブリタニカ)

こゝに於いて吾人は十五世紀の第四階級サンジカリズム運動のはじめを見得る。——少くも獨乙に於ては。この頃からクラフト、ギルド(組合)中の職人の弟子の間には一種の組織と精神が存在して居た。そして其組織なり精神なりは十九世紀に時を得てめき／＼と發達したのであつた。職工等は労働時間の長い事と、忍び難い種々の條件とに不平を抱いて居た。千五百三十九年にリヨンで印刷職工のストライキがあつたが彼等の言明は激しいものである。参考までにこゝに引かう。

『俺達の主人は結構すぎる。あいつらは氣持よく店に凭かゝりながらスキスやら獨乙やらイタリーの學者たちがやつて來ては國々の話をして聞かせるのを聞いて居る。色々面白い話を聞いている外國の珍らしい話が聞けるのだ。だが俺等はごうだ。些少だつてかてふもらへやしない。俺等は朝の二時から夜の八時か九時まで牛か馬の様にこぎ使はれてるが、あいつらはもうたつにすまして一緒に仕事なんかしやがらねわ。』

けれどもまだ「所謂『トリツ』」即ストライキが成功するといふ時代ではない。リオンではかく主人と雇人の間が千里をへだてる有様であつたけれども、一般には嚴格に分れて居なかつたといふ事はその理由の一である。即小僧は職工になれる望があつたし、その職工の中で有望なものは主人の娘を貰つて出世をする事もあつたのである。またこゝに記憶すべきは當時の行政官は今日の如く正義を保護しなかつた事である。リヨンの印刷職工がストライキをやつた時、はじめはその町の役所と拮抗が出來さうだつた。彼等は之に加入せざる職工を壓迫し巡查警吏をはねのけた。そして軍隊は口を出さずにひつこんで居た。ではじめはうまく行つたが彼等が餓ゑ死にさうになつても反抗をやめないものだから、佛王の代官は武力を持って彼等を再び職に就かしめ、五人以上の集會を禁じ、あらゆる武器を携帯する事を禁じ、ブラックレグには暴力を加ふる事を得ずと命令した。かくてリオン印刷工の境遇は以前よりづつと悪くなつた。

で勞動組合的の運動は——昔もそれがサンデカリズム的のものであつたら——悉く失敗した。抑も第四階級中に有力にして有効な團體が形成されるためには五つの條件が要る。

一、完全なる結社の自由、

二、主人と職工との間に大なる溝渠の存する事、

三、社會の秩序をなはりて正義の暴力に勝つポシビリテ一の存する事、

四、多くの下等社會の人々が一の中心に集り居る事、

五、勞働者中に智力思索力の發達せし少數の人々の存在する事、即ち之である。

十五、十六世紀の諸組合の運動に在りては以上の内一つも満足にそなはつて居なかつた。或時はその組合をたほしてしまひさうに見わたる經濟界と一生懸命で争つた事もあつたが結果は何も無かつた。又ある時はクラフト、ギルドといへば大都會の工業にはつきものゝ様に考へられた時代もあつた。けれども十六世紀十七世紀に及んでクラフト、ギルドの運動は遂に衰滅に歸すべき運命にあるといふ事が明になつた。工業のやり方を變へるといふ事はやむを得ぬ事になつた。個人の自由と自由競争との日が到着した。ことに在りてか古い形式のクラフト、ギルドは新しい形式のトレード、ユニオンに場所を譲らねばならぬ。

トーマス、カーライルは逸早く十九世紀の、この革命の世紀のサンヂカリズム的傾向を見て取つた。その書を繙けば明に知り得る事であるが、古き羈絆束縛は悉く取り除かれ、昔の「特權」は過去の記録に止まるのみとなつた。人々は何れも生れた時そのまゝの赤裸々な姿で、世人の尖い環視の中に身をさらさねばならぬ。人と人との間には新しい結合、新式、の關係が成りたゝねばならぬ、

扱このスコットランド農夫の家に生れた天才は己の知己や親族の幾千人が、不愉快な工場にたしこめられて居る事を、始終單調な機械の音につけて思ひ出して居た。

"Hast thou heard the awakening of a Manchester on Monday morning at half-past five by the clock,
the rushing of its thousand mills like the boom of an Atlantic tide, ten thousand times ten thousand spoils

and spindles all set humming there?" 彼は遂には憎惡の念をもつてこの音を聞いた。そして彼の若い時には、その革命の叫びをあげるための學問的感悟を得ようと、ゲーテのウエルテル、シルレルのロバーを操り返しては讀んだ。

兎に角、効力あるサンデカリズムの運動の根本となる條件として私がさきにあげた條件中の二三は今や具備されたといふ事がカーライルの著によつて明に窺はれる。工業革新の結果は人を一の中心に集らした。又一般の知識の發達につれて少數の頭のある職工は結社や俱樂部に集つて労働者全体を支配せんとする傾向が出た。而して主人と職工との間には大なる溝渠が出來て、主人の娘を貰ふなどといふ事は方が一にも出來ぬやうになり、労働者の運命は搖籃を出てから墓場に入るまで單調にして希望なき苦役の外に出ぬ事となつた。一方、近代の意義にわたける所謂國家といふものが漸く建設され、創造され、秩序は整然と具つて正義が暴力のうち勝つなどといふ事はもはや問題にもならなくなつた。かくて、かの要件としてさきに挙げたものゝ中三つだけは十九世紀の初からやうやく具りかけた。後に残るは結社の自由である。これが無くては新労働者運動の出發點なる事業組合又はシンデケートを第四階級が設けるといふ事は出來ないのである。

十九世紀の second decade に至つてはしめてこの結社の自由は概して認められた。但し獨乙に在いては今日まで労働者の結社を制限し、妨害して居るし、佛蘭西ではやつと千八百八十四年に至つて産業組合の自由を得た。千八百年の英國法令は、何人と雖も他と結んで賃金を増し或は労働を減せん事を求め又は如何なる方法によりても商工業を營んで居る主人に反抗したる者は悉く治安判事によりて有罪の宣告を受け適宜、三ヶ月以下の禁獄に所し、又は二ヶ月間懲治監に在いて酷い仕事をさせられた。千八百二十五年に至つてこ

の勞働者壓迫はやく緩和せられて、賃金の事を相談し、決定するといふ事が唯一の目的であり、その會合の方針と異つた意見の人々を虐待するとか妨害するといふ様な事がなければ、その會合は正當と認められた。かくの如き事は事業組合を甚しく獎勵するものではないにしても、兎に角、組合といふものは不可能ではないといふ事になつて來た。そして先づ第一に勞働階級のリーダーダアによつて有望と屬目されたのは英國であつた。千八百四十七年倫敦にわたける勞働者集會でカルル、マレクスはこんな事を云つた。

『主人と雇人との間の反目は英國に於て最も甚しい。然して英國こそは兩者間の決戦の最も避け難き所である。英國こそは民衆の勝利に歸すべき葛藤の先づ起るべき所である。他の歐洲列國の民衆の勝と敗とは一に英國 (Chartist) の勝敗如何による。』と。爾後數年の經過に徴すればこの豫言はやく當つて居るししかしこの話の主旨は、英國がどれ程、將に起りつゝある勞働運動が望をかけた國であつたかといふ事であつた。他國では事業組合は秘密結社であつたけれども、英國では公然之を組織し、示威運動も公然其筋や衆人の前で行つた。それで、カルル、マルクスとフレデリク、エンヂェルスとが Communist manifest を書いた目的は、中等社會の党人の作つて居た秘密結社の時代は既に過去の事であるといふ事を指示せんためであつた。で將來は自由にして拘束なき事業組合の時代である。

『勞働社會は失ふべきものとはその縛られた鎖の他には何もなぬ。獲得すべきものはこの世界である。』英國といふ例が無かつたらこの人々もこんな事をいはうとは思はなかつたであらう。

扱此所に至つてサンデカリズムへ行くべき道はひらけた。

かくの如き經路を履んで遂に今日に至つたサンデカリズムは確かに偉大な運動である。根柢は有史以前の

人性にある。のであるがさてこの運動は將來にいかほどの意義を有して居るものであるかといふ事はまだ明でない。だが兎に角非常なものだといふ事だけは明である。同情によつて然らざるかは知らぬが、この運動が近代の主なる傾向——經濟的、宗教的、政治的、哲學的——傾向と結合し、その唱ふる所は現代の智識ある職工に歡迎されつゝあるといふのは確かである。

でその主義の意義、最後の目的は何かといふ事は興味ある問題であるが、一概にサンデカリストと云つても主義も方針も全然同一轍だといふのでは決して無い。サンデカリズムそれ自身の觀念も混合物であつて、十九世紀後半に在ける佛國の特殊に、經濟的政治的狀況によつて、餘義なく抱かされた労働者の考が大部分である。それでサンデカリズムと云ふ時に含まれてる様な觀念の中で、それだけが白米でそれだけが糠なのか、換言すれば、この主義中、それだけが一時的で、當時代特有の狀況に關聯したもので、それだけが永久的で、人性に基づいたものであるか、問題である。

この文のはじめに云つた通り、サンデカリズムとは労働組合の力により又その司配の下に黄金時代を現出せしめむとする主義であつて、その根本の觀念は、労働社會の正當なる權利の保護はたゞ己自身の獨立壓迫的努力によるのであるが、之を便宜上二つの部分に分けて考へたいと思ふ。即ち前半の實行上の政策と後半の根本觀念とである。實行上の政策とは即ち事業組合の力によつて、之の司配の下に黄金時代を現出せんとするといふ事で、根本觀念とは賤民、第四階級にとつての黄金時代は彼等自身の獨立な強壓的努力によらねばならぬといふ事である。でこの實行政策はサンデカリスト特有の偏見であるが、根本觀念に至つては永久的にして又普通の考である。

サンデカリズムの性質、なりたちから考へて見ると、どうもその實行上の政策は満足に行はれさうにない。一体事業の組合といふものは、人に使はれて賃金をもらつて居る人々——同等の地位にある人々の作つた組合であつて、産業の利益の中から出来るだけ多くを、賃金としてもらひうけたいと云ふのがその目的であるから、労働者以外のものに取つては甚だ以て黄金時代ごころの騒ぎではない。一方が多少満足すれば一方が従つて失意の境に立つのが經濟上の争ひである。

チャアルスも我も共に同じ物を欲しがつてゐる——即ミランである。とかう佛王がチャアルス一世に云つたさうであるが、こんな事は主人と雇人どが何か經濟上の事件で顔を向き合して居る時には、いつでもあるのである。

主人がサンデカリズムを恐るゝ點もこゝであつて、雇人がサンデカリズムを起した所以も此所である。サンデカリズムはこの根本まで行つて、遂にミランを取らんとする考である——この主義は究極にはどうしてもこゝへ行くべきである。で主人が全く手も足も出ない様にといふよりは存在しない様になつた時でなければサンデカリズムの勝利は無いわけである。

彼等サンデカリストの眼には國家もなければ、情實も歴史もない。有るはたゞ資産あるものと無きものの區別である。資産あるものゝ同情などはありがたくない。たゞ利益を同じくし境遇を同じくする第四階級が、飽くまでも一致團結して、反對者と奮闘し、之を足下に臥して全世界を一手に司配せむとするものである。彼等がこの主義を實行するにあつて取る手段はといふと、もとよりこの資本主義の激烈な渦中に在いてその目的を達しやうとするのであるから、一通りの事では無い。が先づ第一に資本主義を破壊せざるべから

らずとあつて、只管に破壊的方面にのみ力を注いだ。

一体この主義がサンデカリズムとして明に認められたのは僅々數年の事であるが、先づ第一に世間をして吃驚させたのはジネラル、ストライキであつた。これはある一種の産業に従事する労働者全体がストライキをやるのである。單に一の工場、一の企業家に對してではなく、頗る廣い範圍に渡つての事であるから、その影響はほとんど及ばぬ所は無い様になるのであつて、世人が恐れたのも無理のない事である。

次にはサボタージュである。これはよく英國の女權擴張者がやる様な破壊的行爲である。或は住宅を焼き工場を襲ひ或は鐵道を壊ち、其他雜多な方面の破壊を手を替へ品をかへて行ふのであつた。それからボイコットもその手段の一端である。

で一度サンデカリズムが行はれ出したら、彼等の主義は極端であつて、妥協や讓歩をがへんせぬ。資本家と労働者との利益は永久に又何處でも一致し得べからざるものとして兩利益の調和に耳をかさぬ。又平民政治家に何等の期待をも有せず、何等の權威をも認めて居ない。飽くまでも極端なその目的を達せむがために極端な手段を用ひて初一念を貫かうとする。

日本には幸にして此種の傾向が今の所では認められない。しかし日本でも智識は漸く行き渡る。民衆の勢力はだん／＼強くなる。文化の進むにつれてそんな事に都合のいゝ條件は益其つて來る事になる。もし政治家資本家が、たか／＼とつて、柳の下には鱒が居るもの、向ふ岸の火事の飛火はしないものと呑みこんで、民主主義の利導を勉めなければ、日本ばかりがこの轍をふまぬといふ事はあるまいと思ふ。

この一文は、一部はハーレーのサンデカリズム紹介を譯し、一部は之によりて書き、殘る一部は余の貧弱なる記憶によつた。